



## 「いま劇場に伝えたいこと」

世界に類のない劇場が誕生して半世紀以上たちます。その間、日本社会は発展し続けた経済優先の社会を経て、バブル崩壊を経験し、様々な形で市民生活を巻き込み変化してきた日本社会です。そんな社会はいつも弱い立場の人間が真っ先に影響を受け特に子どもの生活・環境は一変してきます。たえず他人と比較され、競争を強いられ一日たりともゆつたりと過ごす事のない毎日。いじめ、自殺、果ては親による子どもの虐待死。加えて7人に1人の子どもの貧困、これらを自分の問題として考える余裕すらなく忙しさに追われる大人。「人間の幸福度」で言えば世界の中で56位という低い我が国です。

そんな日本社会の中で劇場は会員減という形でもろに影響を受けながらも「子どもたちの成長発達にとって何が大事か」と言う高い意識を持った親の集団が必死で劇場を支えているのです。劇場は「人間を育てる」という命題を持った素晴らしい社会活動を行っている会であると、私は常々主張してきました。

本来「人間を育てる」と言う視点は国や教育が担わなければならないのに、残念ながらそこには期待できないのが現状です。そこで「世界一の教育」と呼ばれているオランダの教育をご紹介します。まずクラスは異年齢集団で構成されています。学校での活動は①会話⇒日本で云う教師に当たるグループリーダーと生徒が共に参加して行う(サークル対話) ②仕事⇒学習 ③遊び⇒企画されたもの、自由遊びなど様々な形態が用いられる ④催し⇒行事や祝い事等を通して、喜怒哀楽の感情を共有する目的 という4つのパターンでなっています。そして宿題はなく、成績表は自分の内面に対して自分の言葉でまとめると言うスタイルだとの事。勿論教育費は無償です。教育制度の異なる日本では考えられない内容です。

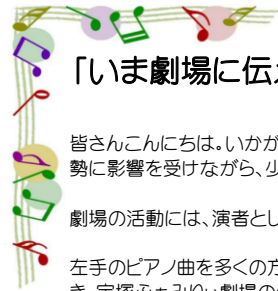
お気づきでしょうか。子ども劇場の活動そのものじゃありませんか！劇場はただのお楽しみ会ではなく、知性と意味を持った社会活動であると私が言い続けている所以です。今後も、劇場を継続していく上で困難さを伴うでしょうけど、どうか自信と誇りを持ち続けて頑張ってください。



演劇企画 オフィス・アートプラン 金安 秀美



(※ふあみげき便り5月号にも掲載しましたが、再度掲載しています。)



## 「いま劇場に伝えたい」

皆さんこんにちは。いかがお過ごしでしょうか。こちらは、昨今の社会情勢に影響を受けながら、少しずつ新たな生活を始めています。

劇場の活動には、演者としても、親としても常に刺激を受けています。

左手のピアノ曲を多くの方に届けたいという思いを汲み取っていただき、宝塚ふあみりい劇場の例会からスタートしたのが、2008年のことでした。

その後多くの劇場との出会いがありました。普通のクラシック音楽の演奏活動だけでは得られない大切な気づきが多くあります。子どもと親、そして社会との接点。

私に子どもができてからは乳幼児の作品、少し子どもが大きくなってきた小学生以上の作品。とても自然な形で舞台を作り、発展させることができています。

その間に東日本大震災では、宝塚ふあみりい劇場と宝塚ロータリークラブの皆さんと手を繋ぎ、東北と関西の文化交流を行ったのは思い出深い出来事です。

いまこの状況の中、私は活動を少しずつ変化させています。

2018年に主催しました左手のピアノ国際コンクールを機に、芸術振興だけではなく、教育福祉にも力を入れています。私が活動を開始したそもそもの出発点である「左手のアーカイブ」プロジェクトは、オンラインの特性を活かした芸術振興事業です。その経験がいま新たな形で求められています。

以前より、半身に障がいがある方から、長距離の移動が難しくオンラインでの関わりを求められてきました。このコロナウィルスの状況を機に、久しぶりにオンライン対応の環境構築に力を注いでいます。

しかしオンライン主体の生活が始まってみると、面白い事に授業だけではなく、オンライン飲み会なども頻繁に行われるように。そういった生活習慣・風俗の柔軟な移ろいには驚かされます。そういった交流の中に、いまの音楽の立ち位置を見いだしていく必要があると感じています。

いつの時代でも、どのような手段を用いたとしても、常に人のつながりを大切にされる劇場に未来を感じます。今後も進化していく劇場の交流活動を楽しみにしています。



左手のピアニスト 智内 威雄

素敵なメッセージを頂いて...

今の事態が終息するまで、まだまだ時間がかかりそうです。その中で何ができるか模索のつづく現状ですが、今を乗り越え、新しい環境と共存しながら、今まで培ってきた経験をふまえ、「その都度できること！」をみなさんと考えながら一緒に進んでいけたらと思います。

金安さん、智内さん、森先生のメッセージ、大きな希望をいただきました。ほんとうにありがとうございました。

運営委員長 喜多河 恭子

## 「ふあみりい劇場とのご縁」

数年前私が宝塚市特別賞を受賞したとき、宝塚ふあみりい劇場も一緒に表彰され、とても縁が深いなぁと思いました。そのとき将棋イベントの復活の話をいただいて、うれしかったです。以前に私の弟子の村山聖が主人公の劇団コーロ主宰「聖の青春」という舞台劇を、宝塚ふあみりい劇場が力になって宝塚に呼んでもらったのも懐かしい思い出です。

今は、新型コロナウイルスのコロナが世の中を壊すような勢いで、先行きの見通しも立たない厳しい状況にあります。この三月の自粛期間のとき不安とともに思ったのは、今自分ができることをしっかりこなすことです。世の中が普通に戻るのには時間がかかりそうですが、生きる大切さを日々噛みしめる体験でもあったと感じています。

人との距離感も現実的に厳しい時代に突入していきますね…。こども達も先々大きな体験を積むことになったと思います。ふあみりい劇場の良さは、いろんな時代背景の中で、社会とのつながりや人との輪の大切さを見据えて、子どもたちが親子で大人の世界に接することができる、自然な心の場なのだと思います。

私は、将棋を通じて子ども達や社会に接しているのですが、耐えたり、負ける痛みを味わったり、勝つ喜びや強くなる楽しさを味わってほしいと願っています。今年のふあみりい劇場の将棋のイベントでも三世代の家族の参加や、初めて将棋を指す人との触れ合いもうれしかったです。時間が足りなくて全員と指しきれなかったのが残念です。



2020.2.23 将棋大会より

またふあみりい劇場のお力で、楽しい舞台劇やイベントをみたいと強く思います。最後は、PRですが、将棋のイベントも是非お願いします。

七段 森 信雄

